

氏名	やま だ けん じ 山 田 健 二
学位の種類	博士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 260 号
学位授与の日付	平成 15 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目	ラッセルの記述理論

論文調査委員 (主 査) 教授 伊藤邦武 助教授 出口康夫 助教授 中畑正志

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、バートランド・ラッセルの「記述理論 (theory of descriptions)」の成立の経緯を再構成すると共に、それ以降のラッセルの思想発展を追跡することで、ラッセルの哲学全体における記述理論の位置付けを試みた研究である。

記述理論とは、ラッセルが1905年の論文「表示について (On Denoting)」で発表した、いわゆる「確定記述」と呼ばれる言語表現にかんする論理分析を意味するが、この論理分析の方法はそれ以降の哲学の方法を決定するような革新的なものとなされ、「分析哲学」という20世紀哲学の代表的学派の礎となったものであった。本論はこの記述理論を、これまでのように日常言語における指示の理論と見なす見方を退け、それに代わる解釈として、ラッセルの思想経歴における二重の位置付けを提案する。すなわち、まず第一に、記述理論とは、ラッセル自身が発見した集合論のパラドックス (いわゆる「ラッセルのパラドックス」) を回避するために展開された、彼の一連の数学の哲学の不可欠の要素として位置付けられるべきであるということ。また、ラッセルの本来の指示論として本論が認定するのは、晩年の大作『人間の知識』における「指標詞」の理論であるが、記述理論は、第二に、その指標詞の理論に対する一定の理論的準備として位置付けられるべきであるということ。これら二つの主張と軸とする本論の構成は、以下の通りである。

まず、序論では、ウィットゲンシュタインとラッセルの交渉に触れつつ、論文の主旨が概観される。ウィットゲンシュタインが、ラッセルのタイプ理論に対して、執拗な批判を行ったことはよく知られている。しかし、本論が示そうとするラッセルの記述理論の二重の位置付けによれば、彼の理論の動機は、実はウィットゲンシュタインの問題意識と重なるものであった、と論者は見る。むしろ、ウィットゲンシュタインの批判によって、ラッセルは結果として、自らの思想的営為についてのよりよい自己理解を持つに至ったのではないか、というのが論者の推断する序論的考察である。

以下、第2章から第4章までは、記述理論が、ラッセルのパラドックスを回避するために提案され、彼の数学の哲学において不可欠の役割を果たしていることが、記述理論の成立の過程の分析を通じて明らかにされる。

第2章「パラドックスと表示」では、ラッセルの表示理論がいかに成立したのかに焦点が当てられる。記述理論は、表示理論を批判的に検討する過程で生み出された。従って、記述理論の成立過程を明らかにするためには、そのプロトタイプである表示理論の成立過程を問うことが不可欠の作業となるのである。ラッセルの表示理論が展開されたのは、『数学の原理』(1903)においてであった。ところで、この『数学の原理』は、1990年には一旦ほぼ完成されていたが、その後、ラッセル自身によるパラドックスの発見(1902年)を受けて修正を余儀なくされ、その翌年ようやく出版されたという経緯をもつ。ラッセルの表示理論は、この修正の過程で生み出されたものである。そこで本章は、パラドックス発見以前の『数学の原理』の草稿と、その完成稿を比較することで、表示理論が形成された筋道を明らかにしようとする。

第1節「最初の表示理論」では、パラドックスの発見以前、『数学の原理』の主要な関心は、'all'・'every'・'any'・'some'・'a' という「量表現」にあったこと、「表示」という概念には、いまだ特別な意味は与えられていなかったことが明らかにされる。第2部「表示の捉えなおし」では、パラドックスの発見後、「表示」に焦点が当てられたことが確認

される。「表示」とは、概念（例えば「男」）を用いて対象に言及するという言語の機能である。そして、定冠詞 'the' が持つ機能、即ち、例えば「その男 (the man)」というように、ある概念に付け加わることで、固有名のように、唯一の対象を表現するという機能が、この表示の代表例であると認定される。そして上記の量表現も、概念に付け加わることによって、それぞれの仕方では表示を行う、一種の「表示表現」として捉えなおされるのである。（なお、表示表現と概念の組み合わせは「表示句」と呼ばれる。）第3節「最初のタイプ理論」では、『数学の原理』においてラッセルが与えた、パラドックスの回避法が、とりあえず表示の理論と切り離した形で概観される。ラッセルが与えたパラドックス回避法とは、（後年の精密化されたものと比べれば素朴なものであるが）存在者のタイプを区別し、パラドックスの原因となった、「自分自身を要素とするクラス」の存在を許さない数学の体系を構築するというものであった。第4節「論理的主語の存在論的含意」では、第3節で確かめられたパラドックスの回避法と、表示理論との関わりが論じられる。この両者の間をつなぐのは、「命題は、その理論的主語となる表現が表示している対象の存在を含意する」というラッセルの考えである。これによれば、表示句がある命題の論理的主語として用いられた場合、その命題は、表示句が表示する対象の存在にコミットすることになる。そして、ラッセルのパラドックスは、表示句が無制限に主語となることで引き起こされていると見なされる。すると、パラドックスを回避するためには、表示句が、無制限に主語となることを防ぐことが必要となる。このような考えに導かれて、ラッセルは、表示対象の間にタイプの区別を導入し、「パラドックスを引き起こすようなタイプの存在者を表示する表示句を論理的主語として用いてはならない」という規則を設定しようとしたことが示されるのである。第5節「変数の可変性の問題」では、第4節で紹介された制限規則が、極めてアドホックであり、パラドックスを回避するという理由以上の、説得力のある根拠を示せていないことが、「変数の可変性の問題」として指摘される。表示句の中の概念（例えば、「全ての男」という句の中の「男」）は、ラッセルによって、表示対象を定義域としてもつ「変数」とも見なされている。すると先の規則は、論理的主語に含まれる変数が走る定義域の範囲、言い換えると、変数の可変性に制限を加えていることになる。そして、この可変性の制限がアドホックである、というのが、ここで言われる「変数の可変性の問題」である。

第3章「記述理論の成立」では、『数学の原理』を完成した後、「表示について」の執筆にいたるまでのラッセルの試行錯誤を、その時期の彼の草稿から再構成することが目指される。この再構成の過程で、論者は、この時期のラッセルの課題は、パラドックスを避けるために、『数学の原理』で設定された規則にアドホックでない根拠を与えることにあったと認定する。そして、記述理論は、まさにこのような課題を果たすために提出された、と見なされる。また本章で論者は、ラッセルが、このような課題を果たし、表示理論から記述理論への脱皮をとげるに至った決定的な要因は、「表示作用に対する純記号論的な観点」の採用によって、「文脈とは独立に対象を指示する関数」としての「表示」概念を捨てた点にあったと主張する。ちなみに、ここで言う「純記号的な観点」とは、「記号の作用は、それが、どのような（他の様々な記号からなる）文脈の中に置かれるかということによってのみ決定される」という考えである。

第1節「意味と表示」では、『数学の原理』脱稿直後のラッセルには、いまだ純記号論的な観点がなかったことが、「表示句という「意味」が、何らかの対象を「表示」する」というラッセル自身の「意味と表示」についての考えを通じて明らかにされる。ラッセルはこの時点で、表示句を、それがおかれている命題の文脈とは独立に、それだけで、一定の対象を表示することができる、一種の関数と見なしていたのである。第2節「真偽概念と表示」では、「命題の真偽」と「命題による事実の表示」というラッセルの考えを分析することにより、『数学の原理』脱稿直後のラッセルが、表示概念を基本的な無定義語であると捉えていたことが明らかにされる。この時期のラッセルは、命題が何かを表示した場合、命題は真または偽となり、命題が何も表示しなかった場合、命題は真とも偽ともならないと見なしていた。つまり、「表示」は、真偽概念の前提となる、基本的な概念と見なされていたのである。第3節「命題関数の根源性」では、変数よりも命題関数を根源的と見なす考えが、ある時期の草稿から現れてきたことが確認される。命題関数の根源性とは、変数の「作用範囲」（つまり定義域）は、その変数が登場する命題関数の論理的構造によって決定されているという事態を意味する。言い換えれば、変数は一種の代名詞のようなものとして捉えられたのである。代名詞がおかれた文脈が、その代名詞の指示対象を確定するように、変数の定義域は、それがおかれた命題関数によって決定されるのである。論者は、このような考え方を、第1節で見られた、「自存的な関数としての表示概念」を揺るがし、「純記号論的観点」の全面的な導入の契機となった思想転換として位置付けている。第4節「「意味と存在」のパズル」で、第2節で確認された、表示を基本的な概念と見なす考えが撤回され

るに至った経緯が、「意味と存在」のパズルに対するラッセルの格闘を通じて明らかにされる。「意味と存在」のパズルとは、例えば「『その男』とは三文字からなっている」というように、表示句を括弧「」で括って主語とした場合に、即ち、ラッセルの言う「意味」を主語とした場合、われわれはいかなる存在にコミットしているのかが明らかでなくなるという難問である。この問いに答える課程で、ラッセルは、表示句が括弧で括られるかどうかによって、別の対象を「表示」している、ということに気づく。そして、「命題関数の充足」という概念を定義項に用いることで、これら二通りの表示のあり方を、別様に定義する方法を見出す。この時点で、表示概念は、基本的な無定義概念という地位を失ったのである。第5節「脱表示—記述理論の誕生」では、先に変数に関して導入されていた「純記号的観点」が「表示」へも適用され、「表示」概念が解体されるに至る過程が示されている。「表示」機能もまた、表示句が登場する文脈、即ち「確定記述」によって規定されていることにラッセルは気づく。すると、表示句は、確定記述を論理的に表現する形式に置き換え可能である。そして第4節で確認されたように、もはやラッセルは表示概念を基本的な無定義語とは見なさない。その結果、一定の理論形式を与えられた確定記述が、表示句よりも根源的な、対象を指示する言語的単位となっているとの見方に、彼は自然にたどり着くのである。ここに、表示概念を基礎概念とする表示理論に代わって、確定記述を基礎概念とする記述理論が登場したのである。第6節「記述理論とは何であったのか」では、これまでの議論を踏まえた上で、記述理論が、いかにして、ラッセルのパラドックスを避ける、アドホックでない規則を提供したかが確認される。対象を指示する作用の単位を表示句と見なした場合、パラドックスを回避するためには、一定の表示句には主語の位置を与え、一定の表示句にはそれを与えないというアドホックな規則を設定せざるをえない。しかし今や、対象を指示する機能は、特定の表示句ではなく、ある一定の論理的形式を与えられた確定記述句である。そして、この確定記述の主語となるのは、様々な表示句ではなく、常に一定の変数 x である。主語で用いられるべき表示句を選択する規則は、記述理論では、主語変数の定義域を指定する規則に読みかえられる。そして4節で触れられたように、この主語変数の定義域が、それが登場する命題の論理構造によって制約されることは、変数の本質からいって自明である。このように表示理論においてはアドホックであったタイプ分けの規則が、記述理論においては、変数の本性にかなったものと見なせるようになる。

第4章から第7章までは、記述理論の含意をもとに、後年の指標詞理論がいかに成立していったかが追跡される。

第4章「述語」では、指標詞理論へと結びつく、「主語と述語の存在論的区別」という記述理論の含意に、ラッセルがいかにして気づくに至ったかが示される。

第1節「不完全者としての述語」では、記号論的観点の徹底によって、ラッセルが、「述語は単独では意味をなさない」というフレーゲの述語観を再発見したことが指摘される。しかし、この時点では、いまだ、「主語として表現される存在者」と「述語として表現される存在者」が、存在者として、別のカテゴリーに属しているという洞察までは得られていないことが確認される。第2節「命題の解体」においては、タイプ理論を洗練する過程で、ラッセルが行った命題観の見直しが紹介されている。しかし、その見直しに際しても、ラッセルが、主語と述語の存在論的区別に未だ気づいていないことが確認される。第3節「ウィットゲンシュタインの批判」において、「主語として表現される存在者」と「述語として表現される存在者」では、存在者の「種」が異なる、というウィットゲンシュタインの指摘が紹介される。第4節「述語という存在」では、ラッセルが上記のウィットゲンシュタインの指摘を受け入れ、主語と述語との存在論的カテゴリーの区別に気づいたことが確認される。そして、ここに至って始めて、ラッセルは、自らの記述理論の含意を十分に自覚したと評される。

しかし、主語と述語が存在論的カテゴリーを異にすることを認めた上で、ラッセルはなお、主語を消去し、存在論的カテゴリーを述語に一元化しようとする。指標詞の理論が登場するには、このようなラッセルの試みが挫折に終わる必要があった、というのが本論の立場である。第5章と第6章では、「主語を除去する構想」と論者が呼ぶ、ラッセルの試みが概観される。

第5章「個体」では、「普遍と個体の関係について」(1911)を中心に展開された、中期ラッセルの個体実在論が検討される。

第1節「固有名」では、ラッセルの思想キャリアの中で、「普遍と個体の関係について」の個体論が占める位置が概観される。時空点と解釈された個体に関して、観念論と実在論の間を揺れ動いた。その思想経歴の最初期と、「外部世界についての我々の知識」(1914)以降の時期において、ラッセルは、時空点としての個体は、何か別のものから論理的に構成され

たものに過ぎないと考え、個体に関する唯名論の立場をとる。その間には含まれた「普遍と個体の関係について」の時期においては、反対に、時空点としての個体を根源的な実在と見なす、実在論的な立場がとられているのである。第2節「多元論」では、時空点としての「個体」概念の理論的前提となっているラッセルの多元論の含意が見定められる。そして、その一つの含意として、「多数の事物の間に成り立つ「関係」が実在的である」という主張が同定される。第3節「関係の理論」では、第2節で確認された「関係の実在論」から、どのような「個体概念」が導かれるかが確かめられる。ラッセルが実在的關係であると見なすのは、時空的關係である。そして、ラッセルは、実在的關係を構成する關係項は、互いに異なる実在物と認定されるべきであると考え。すると、ラッセルが、時空的關係の關係項と考えた、それ自身はどのような性質も延長も持たない「時空的点」、即ち、空間的点と時間的瞬間が、「形而上学的意味」での、実在する個体として認定されることになる。第4節「「認知的」意味での個体」では、前節で述べられた時空点としての個体とは異なる、いま一つの個体概念が紹介される。それは、ラッセルが直接的・根源的な世界認識のあり方とした「見知り」において我々が知覚する、一定の拡がりを持つが、それ以上分割不可能な単位としての個体である。先の時空点が「形而上学的意味での個体」と呼ばれるのに対し、この知覚単位は「認知的意味での個体」と呼ばれる。

第6章「指標詞」では、『外部世界についての我々の知識』（1914）で展開された「論理的構成論」を中心とする、後期ラッセルの個体唯名論が検討される。

第1節「指標詞の除去」では、後期の個体唯名論の一つの側面としての「指標詞の除去」の試みを取り上げられる。指標詞とは、「これ」「ここ」などの、話者の位置に相対的に使われる「指示詞」ないし、そのような指示詞によって言及される「対象」である。論者は、この対象としての指標詞に、先の形而上学的な意味での時空点としての個体と認知的な意味での知覚単位としての個体という区別が可能であることを指摘する。第2節「論理的固有名」では、「ビスマルク」のような日常的固有名を解消し、「これ」「あれ」といった「論理的固有名」のみを、「本来の固有名」と見なす、というラッセルの議論が紹介される。そして、この論理的固有名は、先の指標詞を抽象化したものであることが確認される。第3節「論理構成論」では、論理的固有名として残された固有名をも、従って、それが名指す個体をも解消しよう、というラッセルの論理構成論が検討される。論理的構成論は、「これ」「あれ」といった、話者の位置に相対的な個人的な記述を、特定の話者を前提としない公共的な記述に置きかえる試みである。このような記述の公共化によって、ラッセルは指標詞や、その抽象化としての論理的固有名を除去しようと試みるのである。第4節「本来の名」では、論理的構成論の前提として、ラッセル自身が、認知的な個体を表す指標詞を「本来の名」として認めざるをえなかった、という事態が確認される。そのような指標詞が表わす知覚単位は、記述の公共化が、そこから出発しなければならない前提として不可欠であることに、ラッセルは改めて気づくのである。

第7章「根源的指示」では、「論理的構成論」によっても認知的個体を除去できなかったラッセルが、「指示という身振りの根源性」の認識に至る道筋が描かれる。これはまた、主語の消去に失敗したラッセルが、最終的に主語と述語という存在論的二元論を受け入れた道筋でもある。

第1節「記述と指示」では、ラッセルの記述理論が再び取り上げられ、そこにおける記述と指示の關係、即ち、記述理論における「記述」とは、日常言語における「指示」ではなかったことが改めて確認される。第2節「直接指示」では、論理的構成論の前提としてラッセルが認めざるを得なかった「本来の名」こそが、彼の言語哲学において、日常言語における指示表現と見なされているという認定の下で、その「本来の名」を用いた対象の指示が、意味を介さない直接指示であることが明らかにされている。第3節「指示の根源性」では、「本来の名」による直接指示が、ラッセルにおいて語用論的に理解されていることが確認される。つまり、本来の名による指示対象の特定は、なんらかの文法規則によって定められるのではなく、典型的には、「話者が眼前の対象を身振りを伴って直接指し示す」という、名の使用法によって決定されていると理解されているのである。

最後に、「結論」では、以上の解釈の要点が概観され、本論冒頭で主張されたラッセルの哲学的経歴における記述理論のもつ二重の位置が、改めて再確認される。

論文審査の結果の要旨

記述理論とは、バートランド・ラッセルによって論文「表示について (On Denoting)」(1905)において発表されて以来、確定記述 (definite description) にかんする言語哲学上の代表的な理論と目されるようになった理論である。確定記述とは、例えば『我が輩は猫である』の著者』のように、それ自身は固有名ではないが、固有名と同様に唯一の対象を指示する表現のことである。ラッセルの記述理論は、この確定記述に固有名とは異なった自然で明快な論理的形式を与えた。それによって、「現在のフランス王」といった架空の対象の存在にコミットせずに、いかにしてそれについての一定の言明を行うか」とか、「夏目漱石は『我が輩は猫である』の著者である」という命題と「夏目漱石は夏目漱石である」という命題は、いかにして区別されるのか」といった、それまで難問とされてきたいくつかの問題に対して、鮮やかな解答が与えられることになった。その結果としてこの理論は、言語の論理的分析によって哲学的な難問を解いた輝かしい成功例と見なされ、その後の分析哲学の歴史において哲学的分析の範例として常に参照されることになった。そして、その影響は、言語哲学・数学や論理学の哲学・認識論・存在論など広い範囲に及んだのである。

記述理論はこのように、分析哲学の古典的業績の一つと見なされてきたが、その厳密な意義にかんして今日まで解釈上の論争がなかったわけではない。例えば、リンスキイは記述理論を、「固有名は意味を介さず、直接、対象を指示する」という直接指示論の先駆として評価し、他方クリプキはそれを、固有名を偽装された記述と見なす、間接指示論の一種として批判した。とはいえ、これらの互いに対立する解釈者の間には、ある種の共通理解があったこともまた事実である。それは、記述理論を、「表示について」で批判されているマイノンクやフレゲの存在論に比べ、より唯名論的な存在論の下で、「日常言語」における対象の指示のあり方を説明する理論、即ち「唯名論的な指示の理論」と位置付ける理解であった。

しかし、このような共通理解ないしは標準的な見解は、ラッセルの膨大な草稿が90年代に相次いで公刊されるに及んで、様々な批判にさらされるようになった。本論は、この90年代における草稿に基づいたラッセルの記述理論の見直しの動向を踏まえ、その位置付けについて、従来の研究とは一線を画する、独自の見解を提出しようとしたものである。論者は本論でこの理論についての従来の見方に代えて、ラッセルの思想遍歴における次のような二重の位置付けを提案している。即ち、まず第一に、記述理論とは、ラッセル自身が発見した集合論のパラドックス (いわゆる「ラッセルのパラドックス」) を回避するために展開された、彼の一連の数学の哲学の不可欠の要素として位置付けられるべきであるということ。第二に、ラッセルの本来の対象指示の理論として認定されるべきなのは、晩年の大作『人間の知識』における「指標詞」の理論であり、記述理論はこの指標詞論に対する一定の理論的準備として位置付けられるべきであるということ。

本論はこのように、記述理論についての独創的な解釈を提示しようとしたものであるが、その成果について何よりも特筆されるべきなのは、記述理論の完成へといたるラッセルの草稿の極めて綿密な読解である。一般にラッセルは生涯を通じて膨大な草稿を残しているが、なかでも記述理論へと至る時期の思索の堆積はほとんど超人的な分量をなしている。また、草稿一般の特性として、そこから読み取れるラッセルの思索は紆余曲折を極め、その読解は容易ではない。本論はそのような困難な作業に真正面から取り組んだ結果、ラッセルの哲学に多くの新鮮な光を当てることに成功している。以下の三点はそのなかでもとりわけ重要な洞察であると考えられる点である。

(一) 論者は本論の序論で、ウィットゲンシュタインとラッセルの交渉に触れつつ論文の主旨を概観している。ウィットゲンシュタインがラッセルのタイプ理論に対して執拗な批判を行ったことはよく知られている。しかし、本論が示そうとするラッセルの記述理論の二重の位置付けによれば、彼の理論の動機は、実は命題における「主語と述語の関係」という、ウィットゲンシュタインの根本的な問題意識に重なるものであったとされる。むしろ、ウィットゲンシュタインの批判によってラッセルは結果として、自らの思想的営為についてのよりよい自己理解を持つに至ったのではないか、というのが論者の推断である。これは分析哲学のパラダイムと呼ばれる記述理論の歴史的な位置付けにかんする重要な洞察である。

(二) 論者は記述理論にいたる過程で、ラッセルがそのパラドックスにたいする何通りかの解消法を考案したうえで、それらがいずれもアドホックな根拠を含むことを反省し、アドホックではない根拠にもとづいた解消法の追求の結果として記述理論へ至ったと解釈する。また、ラッセルがこのような課題を果たし、表示理論から記述理論への脱皮をとげるに至った決定的な要因は、「表示作用に対する純記号論的な観点」の採用によって、「文脈とは独立に対象を指示する関数」としての

「表示」概念を捨てた点にあったと主張する。ここで言う「純記号論的な観点」とは、「記号の作用は、それが、どのような（他の様々な記号からなる）文脈の中に置かれるか、ということによってのみ決定される」という考えである。このような綿密な分析は、「表示について」という20世紀哲学史における最重要テキストの一つについての、極めて意義のある成果であるといえよう。

(三) また、論者はこれまであまり注目されることがなかった『人間の認識』における指標詞の理論にも注目し、そこに指標詞についてのラッセルの存在論的分析と認識論的分析の双方が混在していることを指摘したうえで、記述理論との関連を跡付けているが、この分析もまた、論理哲学者としてのラッセルの思索全体の性格を明らかにするうえで重要な指摘であるといえよう。

ラッセルは多産な著述家であり、哲学的な著作に限ってもその量は膨大である。論者は学部学生時代以来一貫してラッセル研究に取り組んできたが、ラッセルの哲学的な著作全体を読みこなした上で、さらに草稿の内容も読解し、合わせて英米を中心とするラッセル研究の主要な研究書にも目を通している。この長年にわたる哲学的文献の膨大な読解を下敷きとして、本論ではラッセルの著作や研究書からの引用を縦横に交えつつ以上のような議論が展開されており、その成果はわが国でもほとんど例のない本格的なラッセル研究となっている。

とはいえ、本論にはなお不満な点もないわけではない。特に、頻繁に立場を変えたラッセルの思想経歴を貫くモチーフは「主語と述語の関係」についての考察であったという論者の主張を、それが数学の哲学におけるパラドックスの解消に動機付けられた問題意識であったという解釈と重ね合わせるためには、命題論と数学の哲学との関係についての、より明快な方法論的反省が必要であったと思われる。しかし、論者が今後さらなる研鑽をつむことによって、これらの解釈をより説得力あるものに仕上げていくであろうことは十分に期待できる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年8月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。